



西新宿の若き女性宇宙開発リーダーはビルの屋上より蟻の行軍と宇宙よりの景観を重ね合わせ Space Shuttle 搭乗に夢馳せ、Gren 宇宙飛行士と留学生時代の友人に天女の舞を披露する日の実現に邁進している。

新宿 NS ビルの展望エレベータから窓下に視線を落とすと、窓越しに映る西新宿の街並みは、みるみる遠ざかり、やがてビルの谷間を縫って走る自動車の列が、まるで蟻の行軍のように連なって見えた。その蟻の行軍の向かう果てには遠く関東平野をとりまく山々が連なり、乾いた晩冬の空気が山肌を深緑色に浮き彫りにしていた。私はあたかもガリバー旅行記の主人公になったかのような錯覚と更に Space Shuttle からの地球景観の様子にとらわれ、箱庭のような街を一跨ぎに飛び越えてみたい、一飛びで雲海を掴んで更に宇宙へ飛び出してみたい、そんな非現実的な衝動にかられていた。

大学4年の終わり、就職を目前にして未だ見ぬ社会への期待と不安、これまでの人生へのやり残し感などに苛まれる中、自分自身の内面から湧き上がる方向の定まらないエネルギーに私は憂鬱さを隠せないでいた。内なるエネルギーが人間としての精神的脱皮を迫っているのか、はたまた人生の岐路を示唆しているのか、私は入口も出口も見えないビッグラビリンスの中で迷走しつつ、意識を社会人へとシフトチェンジしなければならないという強迫観念に迫られていた。

私は大学2年より国際通信のオペレータをしており、その通信衛星を通して世界に繋がっている国際通信オペレーション・ルームがある西新宿の空気は、いつしか自分の体を包み込む透明なベールと化していた。しかし、就職を目前に控え、社会人という現実的な場面が近づくと、漠然とした自分の向上心と逆に自分に求められている具体的な人生目標との間に、重なるようで重ならない階層の相違が横たわり、それが心に重くのしかかっていた。そんな時、この通り慣れた西新宿の全景を NS ビルから眺めてみようと思いついた。

朝焼けが窓を光まばゆい黄橙色に染め上げ、人の視線さえも遮っていた。その光のゲー

トをくぐり抜けると、窓外には新宿の街が乳白色の中に重く沈んでいた。ビルの谷間に目を凝らせば、その視線の果てには水墨画のように朝靄がたなびき、それはあたかも東京の一角が夜からの目覚めに抵抗しているかのようであった。大都市の壮大なる目覚めのシーン、宇宙の夜明けにも重なったシーンであった。その静寂な光と空気が織りなす幻想的な光景は、やがて私の人生を映し出す宇宙をバックにした巨大なスクリーンへと役割を代えた。めくるめく幻想の中、私は5年前のアメリカはオハイオの交換留学時代の光景へとタイムスリップしていた。



Fig-2 宇宙を目指す仲間と

オハイオの果てしのない夜空には澄んだ空気をクッションにして無数の星が輝いていた。凍てつく冬の夜空は空気や星までもが凍り付き、その冷やされた空気が胸に運ばれるたびに心が洗われる思いがした。そこには宇宙空間をバックにした豊かな自然があり、生けとし生けるもの総てが躍動感に包まれていた。宇宙から得るエネルギーには底知れぬ力強さがあり、国籍を問わず出会う人々も皆活動的であり、私の生活リズムも日々高揚してゆくの
がわかった。

私は現地の中学校で音楽の教育実習を行っていた。日本の生徒とは異なり思ったことを何の臆面もなく言い放ち、集団行動を忌み嫌うアメリカの子供たちに囲まれ、精神的にも肉体的にも苦勞と疲弊の連続だった。そんな時、知り合った先生が何事も前向きに挑戦することの大切さを教えてくれた。私の心の奥底に不屈の精神が宿った。

ある時はパーティの幹事も引き受けた。アメリカをはじめ多国からの留学生を集めて、楽しい時間を過ごせたことは良い思い出である。他国の留学生達は自分の出身国に関して深い理解と明確な意見を持っており、私に母国日本を改めて見直す機会を与えてくれた。

精神的に落ち込んでいる時に彼らから幾度も元気を分け与えてもらった。留学生活では孤独が原点となる。だからこそ人との接触は涙が出るほど有り難い。『出会い』が最も大切な財産であることを思い知らされた瞬間でもある。新宿の国際通信オペレータから世界を繋ぐ衛星通信の役割が多国籍留学生の心をも繋いでいるのかと・・・いくつもの想いが走馬燈のように脳裏を駆けめぐり、記憶のかけらはやがてオハイオ最後の日を迎えた。

オハイオでの留学を終え、日本に帰国する途中、漠然とではあるが自分の将来に思いをはせた。『時代の流れが反映されやすく、最先端の技術を身近に感じられるフィールドにいたい。人と人との出会いを大切にする仕事をしたい。留学の経験を生かして、海外と日本をつなぐ仕事をしたい、いつか宇宙人との遭遇が実現するような世界で。』忘れていた自分の決意と原点とが心に蘇った。



Fig-3: 2010年宇宙の旅 ホリエモンと

昼下がりのカップルの歓声が私を我に返らせた。私は留学生活の余韻に浸り、フラッシュバックされた過去の残像にやや感傷的になっていた。私は、その切なさを展望台に置き去りにして新宿 NS ビルを後にした。地上に降りて外を歩くと、ビル風が木枯らしとなって落ち葉を舞い上げ、まるで踊り子のようにクルクルと乱舞していた。SFX にも見紛う落ち葉のイリュージョンに見とれるうちに、私の意識も脳裏の中で回転しはじめ、気が付くと社

会人としての門出の時を迎えていた。

私は今、(株)ジェピコという半導体商社で衛星ビジネスに部品供給という形で携わっている。私は IGG Component Technology というイギリスにある宇宙用部品の品質保証会社を担当しており、ロケットや衛星プロジェクトに対して高信頼部品を供給している。入社当初は、これまで何気なく見ていた BS 放送、ひまわりからの映像を元にした天気予報、京都議定書で決定された温室効果ガスの観測データなど衛星が自分の生活に近い存在であることに驚嘆した。衛星プロジェクトに関わる深度は、日常生活において物事を見る視点の変化、視野の拡大、宇宙への関心などの尺度となり、物を見る目が徐々に開眼されてゆく感覚が爽快であった。いつの日か、自分がプロジェクトに関わったロケットが天空を切り裂き、その分身たる衛星がコスモスなる宇宙空間に安住の地を得て、ミッションを果たしている姿を映像として見るができるかもしれない。その日のために、全身全霊を捧げる日々が続いている。

実際の業務ではイギリスに飛ぶことが多い。世の中、如何に便利になったといえども、電子メールやテレビ会議システムでは埋められない大切な何かがある。私は懐古主義者ではないが、現代ツールに全身を埋めるビジネス・ステップには心理的な抵抗がある。情報システム、e ビジネス、ネットワーク社会、これらの用語は時として人間不在である。デジタル・ツールはおそらく作り手の目的が便利さの追求であり、人間はその便利さを享受する過程で、人間本来の使命やそこから生まれる刺激を忘れる危険性があるからだと思う。つまり、手段としてのシステムが如何に便利になろうとも、『人間とのかかわり』を残さなければ利用者を含めたトータル・システムとしては不完全である。デジタル時代に要求されるアナログ感覚とはまさにそれであろう。

お客さんと直接話し、その語調や表情の変化から重要な何かを感じとる、この過程はビジネス・ステップにおいて必要不可欠である。とすれば、かつて会話と会話を結び付ける結合手役であったオペレータとはいったい何だったのだろうか？国際コールを起点として人と人との間に何かが始まり、そこに人間の意志や希望が凝縮された大きなエネルギーが伝達および増幅されてゆく。私が演じていた役割はそのエネルギー伝達の一部だったに違いないが、そのエネルギー伝播の行き着く先は仕事の役割上知ることにはなかった。自虐的に言えば、自分の役割はハードウェアの一部でありソフトウェア要素が欠けていた。それが精神的な空腹感を生んでいたのか？しかし、今はプロジェクトの起点から終点までの一部始終に関わり、極言すればエネルギーの発生から伝達までも自分の行動力や熱意に依るところが大きい。その意味では、人との出会いを原点に人と人との関わりも含んだ全体システムの真っ直中に立たされ、そのシステムの完結さえも知ることができる。仕事のやりがいや手応えとは背中合わせに、裁量範囲の広さや責任の重さに戸惑うことも時としてある。しかし、取引先の方々とはい、同じ目標を掲げる仲間同士として助け合える人間関係を築くことに最大限の努力を払っている。『人と人との出会いを大切にする。』留学中に身につけた信念を実行することは何事にも代え難い重みがある。

学生時代の苦悩の時から季節は数回循環し、再び晩冬の季節を迎えていた。残業を終えた私は新宿の街の灯を眺めたくなり、再び新宿 NS ビルの展望エレベータに足を運んでみた。あの日、朝焼けに染まっていた巨大な展望窓は、夜の帳（とばり）に包まれ、街の灯を地上にちりばめた無数の星として映し出す厳粛な幻灯機に変貌していた。林立する高層ビルのいただきには赤色ランプが明滅し、まるで宇宙空間を漂う衛星のようにも見えた。その天地が逆転したヴァーチャル宇宙空間は、背面投写型プラネタリウムと化して、それを背景に社会人 4 年目の私の姿を見事に重ね合わせてくれた。えも言えぬ恍惚感に浸りながら、光の導く先を見つめていると、その視線の彼方には仕事への充実感とそこを起点とする将来への夢の予感とが一点に交わっていた。

新宿の街を歩きながら、まだ肌寒い晩冬の風に身を震わせていると、無口なサラリーマン達が足早に駆け抜けていった。私は自信という名のマフラーを首に巻き、挑戦という名のコートの襟を立て、両方を首に強く押し付けた。『明日は誰と出会えるかしら。』と自分の心に問いかけると駅に向かって走り出した。春まだ遠い西新宿に、私の靴音だけが春の訪れを告げていた。



Fig-5: JAXA 展示ブースにて